猫族の人

島浦さんは、僕の会社の同僚だった。

ある日僕は、ふとしたきっかけで、島浦さんの住む家を訪ねることになった。

職場での彼女は、典型的な三枚目キャラで、人を笑わせることが得意な楽しい人だった。容姿は、恋のうわさ話などには縁遠い、男性にアピールしないパーツを選んで生まれたような地味な造りの人だった。

島浦さんの家は、とても高い丘の上にあった。

そこは、地上の喧騒を離れた、樹木や草花の生い茂る、避暑地のようないい場所だった。

（この街に、こんな素敵なところがあったなんて...）

そう感じながら、僕は少し違う世界に来たような感覚を覚えていた。

やがて僕は、島浦さんのおうちに着いて、南側に大きな窓のある畳の部屋に通された。いつの間にか彼女は、白地にグレーの曲線がさまざまに描かれた浴衣に着替え、僕に冷たい飲み物を運んでくれた。

浴衣を着た島浦さんは、まるで別人のように綺麗だった。

体全体から、官能的な女性の魅力が溢れ、顔つきもいつもの彼女とは明らかに違っていた。
普段はめがねの奥に隠れ、近眼で小さいと思っていた彼女の目は、みずみずしさに淡いブルーの光をたたえた大きな瞳に変わっていた。その大きくてちょっと吊り上った目は、どことなく猫の目を思わせた。

（彼女がこんなに美しかったなんて...。

今までどうして気づかなかったのだろう...）

僕は、自分で気づくよりも早く、彼女に恋していた。

彼女が小さなお盆で運んでくれた冷たい飲み物を飲みながら、僕たちは、最近の職場のことや、この家のことや天気のことなどを話した。少しして彼女がキッチンにフルーツをとりにいこうとして立ち上がったとき、浴衣の裾のせいか、少しバランスを崩し、座っていた僕がそれを支えるような形になった。
右手が彼女の腰の辺りを支えたとき、僕の手は、彼女のお尻から一本の線が延びているのに触れてしまった。
それは浴衣の内側で、低い山の尾根のように下に向かっていた。

（島浦さん、尻尾がある！

彼女の目、大きくて猫の目のようだし...。

ひょっとして、彼女は猫...）

僕が目を丸くして自分の手を見ているのを気にすることもなく、彼女は嬉しそうにキッチンへと消えていった。

その日の翌日、僕は職場の親友である杉崎に、昨日起きたことを打ち明けた。

黙って話を聞いていた杉崎は、こんな風に話し出した。

「実は、おれも先週の金曜に、島浦さんに誘われて彼女の家に行ったんだ。仕事絡みの用事で、家から持ち出せない情報があるというのでそれを見せてもらいにね...。

それで、彼女といろいろ話しているうちに、ある時点で、何だかいつもの彼女よりずいぶんと綺麗に見え始めたんだ。

そのときは自分の目がおかしくなったのかと、何べんも瞬きしてしまったよ。でも、それもほんの短い時間だったので、環境が変わったための錯覚だったのだと思っていたんだ...。

でも、お前の話を聞いていると...」

杉崎はそこまで言いかけると、突然そこで口をあけたまま固まったようになってしまった。

何と、杉崎の視線の先には、もう一人の杉崎がいて、ニコニコと得意げに微笑んでいた。

「当然だよ！　あの女は猫族なんだもの...

それでもって、僕たちは犬族ってわけ！

彼女もそれに気づいたから、途中で化けの皮をはがすのを止めたのさ...」

「きみ、だれ？」

僕は目の前に広がる映像が理解できず、もう一人の杉崎に訊ねた。

「ああ。僕はもう一人の彼の分身だよ...」

杉崎と瓜二つの存在は、そう応えた。

「分身って、君、彼の守護霊さん、それとも高次元の彼なの？」

「えへへ。僕は、まだそこまでは行ってないよ...」

もう一人の杉崎はそう言ってまたニコニコした。

「でも、僕は、彼女が悪い人だとは思わない！

彼女は職場でも親切だし、それに...。僕は彼女が好きなんだ！

だから、彼女がたとえ猫族でも何族でも、僕は構わないよ！」

三十五を過ぎた独身男の僕は、いつになくむきになってそう応えていた。

「ははん。キミはまだ猫族のことを何も知らないんだ…。

猫族はね、もう何万年もの間、人間の近くにいてその進化を見守っている種族なんだ。で、どうやって人間のそばにいつもいるようにするかというと、人間の男性との交配によってそれを保っているんだ。

だから、人間社会で化けているのは、彼女のように女性だけしかいない。ああして人間に化けながら、世の中の情報を収集したり、人間種、人格霊格ともに彼らの基準に適う男性を求めては、猫族の種の維持に活用しているんだ。

そして、人間の子を宿した猫族の女性は、猫族の世界に戻り、人間との合いの子を後生大切に育てながら生きていくことになる。その女性が人間世界に戻ることは、二度とないんだ。

どうやらキミは、彼女から視た、理想の男性らしいね…」

杉崎の分身は、そういって僕にウインクした。

杉崎の本体が、ゆっくりと口を閉じ、そのあとブルブルと体全体を揺すった。

杉崎は、何が起きたのかを、ほとんど覚えていないようだった。

分身は、音もなく消え去っていた。

あの日以来、島浦さんと僕は何回かデートを重ね、お互いの気持ちを確かめ合っていた。
街へショッピングに出かけたり、公園を歩いたり、彼女の家で過ごしたりしたが、どこにいても、二人きりになると、彼女は猫族の美しい姿に変容した。

何度目かのデートのとき、彼女は、

「もうわかっているでしょう？

わたしが猫族だということ…」

と、切り出した。

芝生に仰向けになった僕は、彼女が僕の胸の上で爪をニギニギするのを感じながら、

「うん…」

とだけ、つぶやいた。

「まだきみの手しか握ったことのない僕が、こんなことを訊くなんてと笑うかもしれないけど...。

きみも、僕の子供を宿したら、あっちの世界に行ってしまうの？」

僕は、勇気を出してそう訊いてみた。

「わたしのこと、毬と呼んで...。

あなたのことも、賢一と呼びたい...」

彼女はそうとだけ言うと、僕の胸に静かに顔をよせた。

そのようすから、それが事実であることが感じられた。

同時に、彼女が心から僕を慕い、愛していることもわかった。

そして、それだけで、もう十分だった。

僕たちは、風が潮騒のように木の葉を揺らす木蔭の下、

そっと唇を重ねた。

僕と島浦さんがお互いを毬、賢一と呼ぶようになってから半月が過ぎたある日、杉崎が僕に会いたいといってきた。

僕たちは、営業の仕事を適当に切り上げ、四時ごろに隣町の駅前の喫茶店で落ち合うことにした。

約束の時間に五分ほど遅れ、その店に入ると、杉崎は一番奥の窓際の席で僕を待っていた。

「お前、おれが前からこの街の刑務所に関心があったこと、知ってただろう？」

コーヒーを頼み終わったばかりの僕の目を真っ直ぐ見て、杉崎がそういった。

確かに、折に触れて何度かそんなことを言っていたことがある。

この街にあるＩ刑務所は、戦後まもなく造られたもので、戦中には東京中から強制的に集められたペットの犬や軍用犬が、食用や、空襲の際の野犬化防止目的で大量に殺処分された跡地に建っているらしいことを話してくれた。

グラスの水を一口飲んでから、こくりと頷いた僕に彼はこう続けた。

「ついに準備ができたんだ！この時が来たんだ！

おれは、何年も前からあの刑務所内を探索する計画を立て、あらゆる手段を模索してきた。

なぜかはわからない...。あの刑務所の中に、おれを待っている誰かがいることを、子供のころからずっと感じていたんだ。自分は、必ずその人に会いに行かなければいけないんだ、という確信に似た気持ちをね...。

それで、いろんな方法を試していたのだけど、去年の冬に、修験道の行者からこの身を消す技を伝授してもらったんだ」

杉崎がそう言って数秒すると、彼の全身が半透明に透け、背面の壁の絵柄や椅子の背もたれの模様まで見え出した。

先日の杉崎の分身の出現以来、彼に何らかの異変が起きていることを僕は知っていた。

「おれは、今からＩ刑務所に入る。

お前には、その承認として一緒に来てほしいんだ。

もちろん、建物の中までとは言わない。構内でおれが建物内部に消えるのをただ見届けてくれるだけでいい。

心配はないさ。おれが今この話をお前にしたことで、おれたちの間に同調が起き、お前もしばらくの間は自由にその体を消すことができるから」

杉崎は、そう言って子供のような笑みを浮かべた。

僕が何と応えていいか迷っていると、杉崎は、

「じゃぁ」

とだけ言ってレシートを手にレジに向かった。

店を出た僕らは、そのまま歩いて刑務所の方向へ向かった。

僕は杉崎の後を黙って歩いた。

さっき言われた透明化というのを試してみた。

振っていた僕の両腕がすぐに透明になった...。

「君、どうしてもこれはしなければいけないの？

僕は、なんだか君が心配なんだ。

もし、戻れないことが起きたら、どうするつもりなの？」

僕は、前を歩く杉崎にこう尋ねた。

「あははっ。そのときはこれをおれの親に渡してくれないか。

その中に、親不孝な息子の詫び状と、捜索願の出し方を書いといたんだ」

そういうと彼は、僕に淡い緑の手紙を渡した。

ふっと、シダーの深みある香りが風を染めた。

僕たちは、さらに五分ほど歩き、広大な刑務所の塀の外に着いた。

「じゃあ、行くよ」

杉崎のその声だけが残り、姿は鉛色に重々しい塀の中に溶けていった。

僕も、全身が消えていく...と自分に言い聞かせ、体重がゼロになった感覚を覚えると、彼のあとへと続いた。

あの日から、一週間が過ぎても、杉崎は戻ってこなかった。

あのあと僕は、透明になった体で刑務所の敷地内に入り、杉崎が獄舎の建物に融け入るのを確かに目撃し、構内で作業する服役囚や監視者たちの間を通り抜け施設の外に出た。

その三日後、僕は夢の中で杉崎に会った。

彼は、その後、獄舎の中で犬養という人物に出会っていた。
その人は、日本中の犬猫や動物たちの長老を務める、いわば、犬の魂の大元のような存在だった。
ずっと彼を待っていたのは、この長老だったのだ。

犬養は、人間の身勝手な欲望や思惑のために、生きものとしての感情や魂を無きもののように扱う、軍や政府の身勝手な政策を激しく糾弾し、殺処分となる軍馬や軍犬、さらには動物園の猛獣たちの避難・保護に努めていたが、ついには、権力により「売国の徒」との烙印を押され、投獄の憂き目に甘んじていたのだ。

犬養は分魂としてもう一人存在し、明治維新以来押し寄せていた軍国化の波を何とか押し止め、日本に心ある民主政治を確立しようと、政治家としてもおおいに挺身したが、邪悪な力によって、国政を変える前にその命を絶たれていた。

この長老は、今まさに、あの世へと旅立とうとしているが、戦中から蓄積された、動物たちにまつわる人間の慙愧や深い悲しみの念がどうしても浄化しきれず、彼の移行を妨げていたのだ。

そのエネルギーは、犠牲となった数多の動物たちや、空襲によっていのちを奪われた津々浦々の国民の迷魂を取り込み、ますます巨大化した怨念として、今も、東京を含む日本全土に度し難い邪気をばら撒いているのだという。

杉崎は、これから長老と一緒に、その肥大化した負のエネルギーを転換させる儀式に入るのだという...。

いつごろ終わるのか、果たして終わるのかどうかは、天のみ心次第なのだという...。

それだけ語ると、彼は夢の中から姿を消した。

彼の後ろには、まばゆいほどの光が覆っていた。

思えば、杉崎は、子供のころから動物が大好きで、捨てられている犬や猫を見つけては家に連れ帰り、両親に叱られながらも面倒を見ていた。

勇気と行動力はあっても、グループに属したり、リーダーになることはなかった。社会に出た後もそれは変わらなかった。いつも淡々として、自分が好きなことに取り組むタイプだった。

僕は、杉崎が無事に帰ってくることを、珍しく天に祈った。

次の日、僕は、杉崎の両親に会い、彼から頼まれた緑色の手紙と、僕が夢で聞いたことをそのまま伝えた。

杉崎の両親に会った後、僕はその足で毬の家へと向かった。

体温をも越えるような蒸し返す夏の空気を縫って、涼風の遊ぶ丘の上の小道を辿ると、ピンクのインド綿のワンピースを着た毬が嬉しそうに僕を迎えてくれた。

僕らは庭に面したテラスの白いベンチに腰掛け、静かに揺れる木陰の下で、しばらくのときをただ寄り添って過ごした。

僕は、ポツリポツリと、杉崎に起きたことを毬に話した。

「杉崎さん、犬族の魂の人だからね...」

「彼、このために生きてきたのね...」

一つ一つ頷くようにして聞いていた毬は、最後にそう答えた。

その言葉は、深く、深く僕の心に響いた。

（毬と愛し合うことは、即、彼女との別れにつながる...）

この運命の呪縛が、僕の中で音を立てて崩れた。

（そうか...！

僕は、このために生まれてきたんだ...）

一つの大岩のような確信が、僕の中に芽生えるのを感じた。

僕たちは、互いが持つエネルギーに強く惹かれ合い、七つの体をひとつに融合するようにして深く愛し合った。

それは、新たなひとつのエネルギー体の誕生のように感じられた。

僕と毬は、その新しいエネルギーに包まれるようにして、
夏の木漏れ日がやさしく揺れるベンチの上で、時を越えて抱擁を繰り返した。

それからしばらくして、毬は僕たちの子供を宿した。

彼女は仕事を辞め、静かな暮らしの中で、猫族の社会に戻る時を待っていた。
淡々と準備を進めているようだったが、賢一との別れは、これまでの毬の人生の最大の試練だった。

賢一が、すべての秘密を知った上で、ありのままの毬を愛したことは、彼女も十分すぎるほど感じていた。

「できることなら、永遠に彼のそばを離れたくない...。

彼ほどすばらしい人には、猫族の世界に帰っても、もう巡り会わないかもしれない...。

自分が猫族である事実が夢の中の話であったならと、何度願ったことだろう...。

賢一ではないほかの誰かを選んでいた方が、よかったのかもしれない...。

そうすれば、彼を苦しめることもなかったはずだわ...」

毬はそう思いながらも、自分に与えられた宿命に、身を委ねるしかなかった。

一方、賢一は、毬と出逢ったことを、今では少しも後悔していなかった。杉崎との間に起きたことが、彼の心の目を開いてくれたのだ。

振り返れば、賢一の人生には、杉崎というよきパートナーがいつも近くにいてくれた。
杉崎は、勇気があって独立独歩の実行派だったが、賢一は正反対の引っ込み思案タイプだった。いつもグズグズして物事を決められなかったが、事柄によっては、たとえ親や教師がどんなに諭しても、譲らないこだわりも示す子供だった。

その杉崎が、自分のすべてを賭けて、犬族の世界のために未知の世界に踏み込んだのだ。そして、そのとき賢一は、猫族の人を愛していた。けれど、その愛の行方をためらっていた。

杉崎は、賢一にそれを気づかせてくれた。小学生のときもそうだったように、大人になった今も、自らの行動で彼に示してくれたのだ。

誰一人として評価してくれないようなことでも、全身でそこに入って行く...。
杉崎は、いつもそんな男だった。

（正反対の気質を持った僕たちが出会い、ここまで助け合うようにして生きてきたのは、決して偶然ではない...。

杉崎は犬族の世界に縁をもち、僕は猫族の世界に縁があり、ともにその世界のために生きるべく、人としてこの世界に生まれたのだ...。

ものごとは、このテーマに沿って、僕たちの人生を今日まで展開させてきたんだ...。

毬と出逢ったことで、その全容が明らかになったのだ...）

僕は、自然にそう思うようになっていた。

そして、七日ほどが過ぎ、毬と僕にその日が訪れた。

その日、僕が毬の家を訪ねると、彼女は和室の吊るした籐椅子に座り、じっと窓の外を見ていた。

「お迎えの日...」

「今日だって...」

庭の青垣のあちこちに点るように咲いた、釣鐘型の藤色や青紫の花を見つめながら、毬は静かにそう言った。

僕はそっと彼女の肩に手を置いた。

毬は、その手に両手を重ねた。

「今まで、ほんとうに、ありがとう...。

ほかの誰かと結ばれても、

わたしのこと、どうか忘れないでね...。

今度は人間に生まれ変わって、賢一のお嫁さんになりたい...」

涙に揺れる毬の瞳は、世界のどんな宝石よりも美しく愛しかった。

その言葉に、僕はどんなにか勇気を得たことだろう...。

「きみが、人間に生まれ変わるのを待つ必要はないよ...。

僕が、猫族の世界に往けばいいのだから...。

僕は、きみといるためならば、この世のすべてを手放すよ...。

でも、もし、きみがそれを望まなければ、僕はすべてを諦め、去っていくつもりだ...」

僕は、毬の揺れる大きな瞳を、真っ直ぐに見てそう言った。

その瞳が、空の虹を映したように明るさを取り戻した。

「あなたがそう言ってくれるのを、ずっと待っていたの！

わたし、知っていたわ...。

あなたなら、それができることを...。

だってあなたには、もう尻尾が生えているもの...！」

毬はそう言うと、僕の胸に飛び込んだ。

腰の辺りを見ると、透明な僕の尻尾がうれしそうに揺れていた。

僕らは、ひと時を喜びの涙に染めた。

そのうちに、どこからともなく静かな楽の音が響きだし、七つの異なる色の球体を螺旋の渦に並べたような透明な乗り物に乗って、猫族の使者たちが姿を現した。

すると、抱き合った僕らが畳の上に落としていた影が薄くなり、僕の腕や毬の髪や肩が透け始めた。

そして気がつくと、僕らはその球体の乗り物から、毬の家の瓦や美しい庭の様子を見下ろしていた。

和室の畳の上には、僕たちが身に着けていた衣服が、白い夢の残骸ように、抜け殻のように並んでいた。

僕は、心の中で、両親や、職場の仲間たち、今生で知り合ったすべてのいのちあるものたち、そして、杉崎にお別れをした。

「さようなら、みんな...。

　さようなら、地球...。

　ありがとう...。

　ありがとう...」

僕と毬を乗せた虹色の船は、猫族の世界に向かって、光の渦の中を滑るように進み続けた...。

「あなたがいなくなったときは、わたし達も賢一も本当に心配したのよ...。

それが今では、まったく逆になったわね...」

賢一の母は、そういうと少し微笑んで、墓の前で手を合わせた。遺骨のない、戒名だけの墓だった。

賢一と毬がこの世から突然消えてから、早や、三年が経っていた。

「叔母さん、賢一のやつ、今とても喜んでますよ...」

しばらく手を合わせていた杉崎が、嬉しそうにそう言った。

賢一の両親は、顔を見合わせて少し微笑を浮かべた。

「そうだよね。毬ちゃんと一緒なんだものね...」

手向けた花を揃えながら、母親が語りかけるように言った。

賢一の墓参りを済ませたあと、杉崎は、一人、毬が住んでいた丘の上の家に向かった。

毬の家があった辺りには、夏草が茫々と茂り、大きな樹が、あちこちに深い緑の影を落とす里山状態だった。

杉崎は、近くを通りかかった老婦人に、毬の家のことを尋ねてみたが、八十年の彼女の人生で、この場所に家が建ったことは今まで一度もなかったとの応えだった。

杉崎は、家の入り口だった辺りを選び、三人がよく職場で食べていたお菓子や好きだった飲み物を並べ、いつまでもそこに佇んでいた...。

おわりに

　人は、さまざまな形の愛を経験しながら、成長を重ねていくもののようです。

それは、乗り物に乗って一つの目的地へと向かう、旅にたとえられます。
途中に見える車窓からのさまざまな風景が、さまざまな愛の形であり、最終目的地が、やはり『愛』です。

　わたしたちは、さまざまな愛を経験しながら、ほんとうは、形などない、一つしかない愛に戻っていく、旅の過程にあるのではないでしょうか。

　この物語を書いた当時、わたしには、このような、すべてを賭けて愛に捧げるタイプの愛に強く共鳴していました。きっと、わたしの中で、ずっと保たれ続けてきたテーマなのでしょう。

　それは、これからどう変わっていくのでしょうか。あるいはまだまだ堅持されるのでしょうか。

　わたしにはわかりません。

　ただ、目的地だけは、始めからわかっていたのだと思うのです。

２０１４年５月１０日

b-svaha

猫族の人

http://p.booklog.jp/book/85668

著者 : b-svaha
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/85668

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/85668

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ